

人権コラム 心、豊かに

◆ 見た目ではわからない障がい

3月3日は桃の節句として知られていますが、「耳の日」でもあることをご存知でしょうか。耳の日は日本耳鼻咽喉科学会の提案によって、一般の人たちにも耳の病気のことや健康な耳の大切さを知ってもらうため1956年（昭和31年）に制定され、毎年3月3日には啓発活動等も行われています。ところで、耳が聴こえにくい状態を「難聴」と言いますが、難聴には生まれつきの人や高齢化に伴うものだけでなく、長時間大音量で音楽等を聞くことなどで発症するイヤホン難聴（音響性難聴）のように、どんな人でも難聴になる場合があり、誰もが聴覚障がいの当事者になる可能性があります。

一方で、聴覚障がいのある人はその見た目だけでは障がいがあることが分かりづらく、呼びかけられても気付かない、緊急時の警報やサイレンなどが聞き取れず取り残されてしまうといったように、十分な理解が得られず誤解されたり、困っていても気付いてもらえなかったりすることがあります。

では、聴覚障がいのある人とうまくコミュニケーションをとるにはどうすればよいのでしょうか。聴覚障がいのある人とコミュニケーションをとるには、手話、口話（口の動きから何を言っているか推測し、会話する方法）、筆談等の方法があります。手話は、双方が習得していなければコミュニケーションが取れず、口話は同音異義語などが伝わりにくいことがあり、筆談は正確に伝えることができる反面、手話や口話に比べて時間がかかるなど、それぞれの方法にはメリットやデメリットがあり、相手や状況に応じて適切な方法を選ぶことが必要です。

近年では聴覚障がいに限らず、障がいのある人に対して合理的な配慮が求められるようになってきました。本当に必要な支援は相手や置かれた状況によって異なるため見極めることは難しく、だからこそ、障がいのある人でもない人でも困っている人と接する際には、一人ひとりと向き合おうとする意思をもってコミュニケーションをとることが一番大切なことなのではないでしょうか。